

討論メモ

「対英米蘭蔣戦争終末促進腹案」

令和 6年5月21日

森田晃司

1. 今月は、近現代史研究家の林千勝氏の「日米海戦 陸軍の勝算」をベースに、先の大戦に備えた日本の準備、研究などを振り返りました。
 - ① . 開戦前の二年間、日本の英知を結集して英米を中心にした国際情勢の分析、研究が行われ、頭書の腹案として報告されていたこと。
 - ② . その報告に沿い、やむを得ず開戦に至った時には、米軍との激突を避けつつ西進してインド洋を制圧し英国の屈服を目指すことが、国家戦略として閣議決定されていたこと。
 - ③ . 上記の合理的な国家戦略が閣議決定されていたにもかかわらず、海軍はこれを無視してハワイ、ミッドウエアー、ガダルカナルと太平洋を東進して、米と激突し、壊滅したこと。
 - ④ . 戦後はこうした史実が隠蔽され、“日本は無計画で無謀な戦争に突入した”との世評が横行していること。などを森田が説明しました。詳細は専用ページに掲載されているレジメを参考ください。

2. 次いで、出席者7名による様々な角度からの意見交換を行い、下記のような意見が出されました。

- ・開戦劈頭のマレー沖海戦では日本の航空部隊が英国の誇る東洋艦隊を一蹴し

たが、あまりにも一方的な戦いで、英国のみならず、日本も驚いたようだ。

- ・真珠湾は大成功と喧伝されたが、実質的には戦果は乏しかった。

- ・指揮官の南雲忠一が無能力と批判されるが、人事を行った山本司令長官の責任だ。

- ・山本は日本に残っていたが、本来なら現場で指揮を採るべきだった。

- ・ハワイは奇襲ではなく、米国政府は予知していたとの指摘がいくつかのソースから出ている。

- ・永野修身軍令部長や山本司令長官は、大日本帝国の敗戦を企図していたとの見方もある。マルクス主義の「敗戦革命」を狙っていたのか？

- ・「資本論」が一番読まれたのは日本だそうだが、日本のインテリ、軍人の中にも大日本帝国の敗戦を願っていた人がいたようだ。

- ・右翼と言われる北一輝なども根はマルクス主義者だ。

- ・東条英機首相はハワイ奇襲を事前には知らされず、また、ミッドウエーの敗戦の実態も知らされなかった。

- ・ガダルカナルでは全く無謀、無益な戦いで艦隊を失い、優秀なパイロットを無

駄死にさせた。この時点で西進する能力を失い、日本の敗戦が確定した。

・アッツ島の玉砕も悲劇だ。何のためにアッツ島に進出する必要があったのか、理解に苦しむ。

・アッツ島にゼロ戦を無傷で残したので、米軍に研究され、グラマン、ロッキードなどの戦闘機の向上に利用された。

・戦後、中島航空機などを見学した米技術者が、粗末な設備での戦闘機づくりにびっくりしていた。

・現在、米より兵器を輸入しているがすべてブラックボックス付きで、日本側では自由に開けられない。

・「国家戦略」通りに西進していればインド洋まで行けただろう。海軍のハワイ攻撃は本当に残念だ。

・山本五十六は米大学に留学したのに、米国のことが分かっていなかったのだろうか？

・戦後の言論統制、焚書坑儒はひどい仕業で、ポツダム宣言違反だ。

・言論統制などに協力した日本人は、独立回復後も政官財の要職に居続けたのではないか？

・日本の並外れた敢闘精神は神道のせいと、戦後、神道を研究したが、一神教の

欧米人には、神道は理解できなかつたようだ。

- ・明治維新前後も欧米は日本人の戦意を恐れて侵略をあきらめたようだ。

- ・近代史、特に第二次大戦前後のことは学校では全く教えない。また、多くの事柄が隠蔽されている。

- ・今後の日本の立て直しには、歴史をよく勉強することが必要だ。

以上